

省力・低コストの稲 WCS 生産を目指して

名称：MKFカンパニー（代表 富樫 喜重郎）

所在地：田村市都路町

【田村市の避難指示解除状況】

・平成 26 年 4 月 1 日 都路地区（20km 圏内）の避難指示解除準備区域が解除

【プロフィール】

都路地区の農業の復興を目指し、平成 25 年 1 月に畜産農家 5 戸で設立。稲発酵粗飼料（稲 WCS）用のイネを共同生産。湛水直播栽培を導入。

【震災前の経営と避難状況】

震災前の経営は、「水稻＋繁殖牛」で、各自の経営規模は水田約 2ha、草地約 2ha、繁殖牛 10～20 頭で、飼料は自給の稲わら、牧草及び水田の畦畔雑草を給与。原発事故により福島県内及び関東へ避難。

【設立の経緯】

都路地区では、平成 23、24 年に水稻の作付が制限され、2 年間で水田一面にセイタカアワダチソウが繁茂した光景を目にした富樫さんは「早く営農再開しないと、農地が元に戻らなくなる。」との危機感を持ちました。平成 25 年春からの水稻作付再開の動きが出てきた際、田村農業普及所から稲発酵粗飼料^{※1}（稲 WCS）生産の提案があり、自給飼料の確保と畜産業の再開を目指し、都路地区の畜産農家 5 戸が集まり、平成 25 年 1 月に任意組合「MKFカンパニー」を設立しました。

設立時の経営規模は、水稻 23ha、草地 15ha、繁殖牛約 70 頭です。ちなみに組合の名称は、最初の案は「都路機械管理利用組合」だったそうです。しかし、覚えやすい名前にしようと、都路の M、機械の K、農場（Farm）や 5 人（Five）の F を取って「MKF」とし、仲間の意味でカンパニーを加えて「MKFカンパニー」に決定したそうです。

構成員は、当初は他の水稻耕作農家も含めて検討されましたが、稲 WCS の利用が畜産農家に限られることから、現在の 5 戸でのスタートになりました。

※1 稲発酵粗飼料：水稻の子実と茎葉を同時に収穫し、発酵させた牛の飼料。

【取組の内容】

初年目の平成 25 年は、避難指示解除準備区域を含む地区の約 20ha で WCS 用イネを作付けました（うち 4ha は受託）。単収は計画（2.1 トン/10a）を上回り、稲 WCS 生産量は、約 480 トン（2.4 トン/10a、300kg ロールで約 1,600 個）となりました。

作業機械は、東日本大震災農業生産対策交付金を活用して、専用収穫機とラッピングマシーンをリースで整備

しました。これにより、適期での収穫と短時間でのラッピングができ、良質な稲 WCS の生産が可能となりました。



MKFカンパニーの皆さん（5名のうち4名に集まっていただきました。左端が富樫代表）

発酵した稲 WCS は、サンプルを採取して放射性物質検査を行った上で、組合員が飼育する繁殖牛約 70 頭に給与しました。

その後、WCS 用イネの作付面積を徐々に増やし、平成 28 年には 32ha まで拡大しました。面積増に対応し、福島県営農再開支援事業を活用して WCS イネ専用収穫機、ラッピングマシン、トラクタ、ロールグラブなど 13 種類計 14 台をリース導入し、これにより、稲 WCS 生産の機械化一貫体系を実現しました。

平成 29 年の作付面積は、初年目の約 2 倍に相当する 39ha となりました。稲 WCS の生産は、夏季の天候不順により生育が落ちたこともあり約 660 トン（1.7 トン/10a。300kg ロールで約 2,200 個）で、このうち、2/3 に相当する 420 トン（約 1,400 ロール）は組合員の繁殖牛（約 100 頭）の飼料とし、残る 1/3

の 240 トン（約 800 ロール）は地区内の畜産農家に販売しています。

平成 26 年からは、より低コスト栽培を目指して湛水直播（たんすいちよくは）栽培^{※2}にも取り組んでいます。播種は鉄コーティング種子^{※3}を専用機械で田面に条播する方法で、徐々に面積を増やした結果、平成 29 年には全体の 3/4 に当たる 30ha まで拡大しています。水稻品種は「チヨニシキ」で、病害に強く、耐倒伏性もあることから、初年目（平成 25 年）から作付けしています。

※2 湛水直播栽培：稲の種を直接田に播いて栽培する方法（湛水と乾田の 2 種類がある）の一つ。育苗作業が不要のため移植栽培に比べて省力となる。

※3 鉄コーティング種子：湛水直播で表面播種する際、粃が水面に浮き上がらないよう鉄粉と焼石膏の混合物でコーティングしたもの。



WCS 用イネの専用収穫機

【関係機関の支援】

補助事業の活用にあたっては田村市からの協力を、WCS 用イネの栽培管理及び湛水直播栽培については田村農業普及所から技術指導を受けました。さらに、種子の鉄コーティング技

術や播種技術については、農機メーカーの協力も得て技術を習得しました。

【稲 WCS 導入効果】

稲 WCS 生産と繁殖牛飼育との作業競合がほとんどない上に、重労働だった稲わらの乾燥・収集作業が不要になったため、労力が大きく軽減されました。

また、稲 WCS の牛への給与は、収穫した翌年の 1 月から 12 月までの 1 年間であり、自給飼料の長期安定供給が可能となりました。さらに、親牛、子牛とも稲 WCS の嗜好性が高く、食欲の良しあしにより体調状態を推測できるほどになっています。



ラッピングマシーン

【課題】

稲 WCS の生産技術は、生育初期の水管理などを除けば、一定の栽培水準に達しています。湛水で播種し、発芽後は着根するまで落水と湛水を繰り返す間断かんがいを行います。早期に湛水してしまうと浮き苗になったり、苗立ちが悪くなり、湛水期間が短いと雑草が繁茂してしまう要因となります。着根までの細かな水管理と除草剤

散布タイミングの習得が課題となっています。

経営的な課題としては、ほ場が分散しているため、機械の移動時間に時間を要しています。最大 30 分ほどにもなり、「ほ場の集約化や大区画化により、作業効率を上げる必要がある。今後、地区内でほ場整備事業「古道地区」が計画されているので、期待している。」とのことです。



稲刈り取り・ラッピング後、搬送前の風景
(田村市提供)

また、機械整備のうち、現在、WCS イネ専用の収穫機を 2 台導入していますが、水稻のほかにデントコーンやソルゴーなどの飼料作物も収穫できる機械が開発されれば、機械整備費も抑制できると考えています。

【目標・将来構想】

都路地区では、農業をあきらめ、離農する農家が多くなっています。農地の荒廃を防止するためにも、これらの農地を受託により引き受ける体制が必要となっています。富樫代表は、「現在の組合員 5 名では、WCS 用イネの栽培は最大 50ha までで、それ以上の規

模を目指すには雇用労働が必要。」と、将来の規模拡大を見据えていました。

また、組合員である 5 人の年齢は、現在、30 代前半から 60 代までと幅広い構成となっています。富樫代表は、「都路地区の農業を再生するには、もっと若手が戻ってくる必要がある。若手が担い手や雇用労働力として、地域の農業に加わることで、若い世代にバトタッチできる。」と言い、次世代へ確実に稲 WCS 生産を引き継いでいくことが最大の目標となっています。

(平成 29 年 12 月)